

FD Information

CONTENTS

- インタビュー ▶ 1
- 平成 28 年度前期 京都女子大学
- 『学生アンケートによる優秀授業賞』の受賞について ▶ 2
- FD 推進 活動レポート ▶ 8
- 学修ポートフォリオに関する FD 講演会及び使用説明会の実施
- 平成 29 年度 FD 委員会、FD 推進委員会委員一覧 ▶ 8

第 25 号

2017
JULY

インタビュー

本誌を通じて、学生の学ぶ意欲を引き出す魅力ある取り組みをされている先生の考え方や工夫について学内で情報共有を図り、少しでも参考にできればという趣旨から、インタビューを実施しました。

平成 28 年度【学長採択型】特色ある教育プログラム開発補助事業 採択事業

「ウィキペディアタウン東山」

図書館司書課程講師 桂 まに子 先生

Q なぜ取り組んでみようと思われたのですか？

A 平成 24 年度より導入された図書館司書課程の新カリキュラム以降、大学の図書館司書課程が目標としているのは即戦力となる司書の養成です。とりわけ「情報技術力のある図書館員」は今後の図書館サービスを発展させる要となる人材です。そこで、本事業では、図書館員を真剣に目指す学生が受講する図書館総合演習を「情報技術を駆使したアクティブ・ラーニング」の手法で授業設計し、情報を「収集・整理・編集・発信する力」を体系的に身につけられる司書養成の実践を試みました。



Q 「ウィキペディアタウン東山」とは、どのような取り組みですか？

A ウィキペディアタウンとは「その地域にある文化財や観光名所などの情報をインターネット上の百科事典「ウィキペディア」に掲載し、さらに掲載記事へのアクセスの容易さを実現した街（町）のこと」（Wikipedia より）を指します。本事業では、誰でも編集に加わるのできる Wikipedia と OpenStreetMap (OSM) を組み合わせて「ウィキペディアタウン東山」プロジェクトと称し、京都市東山区の六原界限についての文献収集、まち歩き、Wikipedia 記事の編集および OSM による地図編集を受講生 9 名で行いました。

今回のプロジェクトで特筆すべきは、学生たちの主体的な学びを図書館員や外部講師、地域の方々をサポートしてくれた点です。Wikipedia と OSM に関する技術面のレクチャー、地図編集を意識したまち歩きの体験、まちの歴史や文化に関わる当事者の方々による解説、図書館による関連文献の準備・提供、パソコンやスマートフォンを用いた編集作業の協力など、学びのプロセスに応じた学習環境を整えることで、効率良くアクティブ・ラーニングを進めることができました。

Q 取り組まれた結果、得られたことや感じたことなどについて教えてください。

A 平成 28 年 12 月 10 日に「東山ウィキペディアタウン&マッピングパーティ」を開催し、まち歩きの後、Wikipedia の新規記事の作成 1 件（幽霊子育館）、既存記事の編集 2 件、写真の追加 2 件、OSM の六原界限の地図編集（松原通り、六道珍皇寺）、Wikipedia と OSM の相互リンク 2 件を行い、その場で即座に地域の情報が更新されました。ウェブ上で「幽霊子育館」を検索すると、公式 HP の次に本学の学生が作成した Wikipedia の記事がヒットするのでご覧ください。

授業開始時、学生たちは Wikipedia の閲覧は日常的に行っているにもかかわらず編集をしたことはなく、二次利用を可能するために始まった OSM の存在も知りませんでした。本実践を経て、Wikipedia の文章 1 つ、OSM の建物情報 1 つをウェブ上で発信するためにどのような準備をし、正確な情報を責任持って発信するには何に注意しなければいけないのか、情報を生み出すことの難しさと大切さを学んでくれたことでしょう。

Q ありがとうございました。最後に一言お願いします。

A 本事業の取り組みは、大学の学びを地域へ還元する地域連携の 1 つのあり方であると考えます。平成 29 年度も学まち連携プロジェクト「京女まち歩きオープンデータタウン」として事業を継続し、学生たちが主体的に地域を知り、地域の寺社や商店と繋がり、外部からの技術的サポート、図書館による地域資料のサポートを受けながら東山の地域情報を正しく発信する学習機会を提供していきます。



平成28年度前期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』の受賞について

アンケート結果を活用した取り組みとして、学生による「授業アンケート」の結果に基づき、学生から高い評価を得ている授業を顕彰するため、京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』を実施しています。

今回9名の教員が京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』を受賞され、平成29年2月13日（月）、本学A校舎大学新会議室にて表彰式を行い、学長より表彰楯が贈呈されました。

なお、受賞された教員には本学の授業改善活動に資するため、「授業紹介シート（授業の取り組みや工夫など）」の執筆にご協力いただきましたので、ご紹介いたします。

※「授業紹介シート」は本学ホームページ（<http://www.kyoto-wu.ac.jp/>）から「大学案内」を選択後、「教育の特色」項目内の「FD活動」ページからも閲覧いただくことができます。



授業区分① 受講者数が25名以上～49名以下の開講授業

受賞対象授業名	Listening & Pronunciation Ⅲ
曜日・講時	火曜日4講時開講
担当者名	日高真帆
所属学部・学科	文学部英文学科

授業の取り組みや工夫などについて

当該授業は「英語での実践演習を通して発音やリスニング力を高め、英語による自己表現力を高める」ことを目的としています。教科書としては英語の発音を丁寧に解説し、多様な発音練習やリスニング問題を備えたCD付きテキストを選定しました。CD付きテキストを選ぶことで自主学習でもリスニングや音読練習に取り組みやすいようにしました。

授業では、第一に「一人一人の学生のニーズに応える」ということを重視しました。これは、特に大人数の授業では現実的に遣り辛いことですが、特に発音については個別指導が欠かせないため、敢えて取り組みました。そして、実際に「一人一人の発音力を高める」ことを本気で目指すには、各自の発音の改善点を洗い出し、本人がその点を意識的に改善できるよう助言する必要があると考えました。

そのため、学期中に中間発表と期末発表の機会を設け、前者では難易度の高い英語の発音が集中的に含まれた英文の朗読を、後者では総合的な英語表現力を養うために物語文の暗記・朗読を課題としました。これらは所謂「試験」としても位置づけられるものですが、「試験のための試験」ではなく、各自の発音を改善する上での実践的な「舞台経験」となるように、事前に「リハーサル」の機会を設けました。この「リハーサル」では、一人一人の朗読を聴いて発音上の問題点を分析し、各自が改善点を意識できるように分析結果を詳細に伝えてより良い発音に向けての助言を行いました。履修生も多いためこのような指導法は時間が掛かりますが、一人一人の発音の特徴や課題が異なる以上、その点を各自が認識した上で学習を進めなければ同じ過ちを繰り返し、不要な癖を放置・助長することになり兼ねないと考えました。授業が進むにつれて各自の課題に取り組む学生達の姿に手応えを感じ、学期を通して個人指導を複数回行いました。

また、個人指導以外にも、発音練習とリスニング練習が相乗効果を発揮して英語力を高められるよう工夫し、ペアワークを含む音読練習やリスニング問題に取り組む時間も頻繁に取るよう心掛けました。特に音読や暗記の重要性を認識していない学生が多いため、正確な音読練習や暗記訓練の日常的な積み重ねの大切さを伝え、自習を促しました。そうする内に、授業開始時に教室に入ると、そこここから声を出して課題文を練習している声が聞こえて来る程、学生達も熱心に取り組むようになりました。また、全体的に欠席も少なく、二回の発表を通して学生達の発音に様々な改善が認められました。

今回「優秀授業賞」を受賞できたのは、英語力を高めたいという履修生達の熱意と日々の努力があってこそと思います。今後も学生一人一人のニーズに少しでも応えられるよう、より充実した学習のためのきっかけ作りやアドバイスができれば幸いです。

受賞対象授業名	生理学実験
曜日・講時	金曜日 3-5 講時開講
担当者名	田中 清
所属学部・学科	家政学部食物栄養学科

授業の取り組みや工夫などについて

今回受賞のお知らせを頂いての第一印象は、「え、なぜ選ばれたの」でした。前期にはこの実験以外に、講義科目も担当しており、自分ではむしろそちらの方が、プリント作成などに時間をかけて準備したつもりでしたので、この実験が選ばれたと聞いて、非常に意外でした。しかし改めて学生による授業評価を読み返して、何となく理由が分かったような気がしました。複数の学生がフリーコメント欄に、「助手さんにはいろいろ教えて頂き、ありがとうございました」という言葉を書き込んでいました。実際この実験においては、ラボラトリースタッフ (LS) の岡島理奈さん、山口朝子さんがとても活躍してくれましたので、この賞は私個人ではなく、2人のLSさんをも含めた生理学実験チームとして頂いたものと考えております。

2人のLSさんに大きく依存していた科目なので、私の取り組み・工夫と言われても、何を書けば良いのか良く分からないのですが、以下のような点を念頭に置きました。

1. 管理栄養士養成課程であることを意識して、実験操作そのもの説明はもちろんですが、今やっている実験が、臨床栄養とどう関わるのかについての意義づけも説明するように心がけました。
2. 3回生前期は実験実習が非常に多い時期であり、教員が全員何十ページものレポート課題を課したのでは消化不良となり、かえって教育効果が上がらないと考え、要点を簡潔にまとめるのも大切な訓練であると説明して、そのようなレポート作成を指示しました。
3. 実験は講義より学生との距離が近い貴重な場なので、できる限り各実験機を見回って、学生に声をかけるようにしました。

この場を借りまして、2人のLSさんのご尽力にあらためて御礼申し上げますとともに、今後自分自身の教育力を高めるべく、努力したいと思います。

受賞対象授業名	中国語 I A2
曜日・講時	金曜日 2 講時開講
担当者名	劉 小 俊
所属学部・学科	文学部外国語準学科

授業の取り組みや工夫などについて

当該授業は発音を中心とする入門レベルの中国語の授業です。この授業で一番心がけているのは、中国語を勉強して中国語が嫌になる学生をゼロにすることです。具体的な取り組みは次の三点です。

1. 勉強する前から発音に「苦手」と思いこむ学生が少なくありません。それを解消するために、発音の学習に入る前、まず中国語の音節の構造を説明し、日本語に相似するところもあることで学生の緊張を解す。また、発音の指導をする時は、学生が自信を無くさないように、一人の学生に集中して指導することを避けます。みんな同じゼロからのスタートなので、みんなで楽しく中国語を勉強しようという授業の雰囲気を作り、その中で、学生がどんどん自信をつけて、大きな声で発音するようになります。
2. 発音の指導と練習、特に最初の段階では学生が退屈になりがちです。この授業では、勉強した内容ですぐ中国語でのコミュニケーションを試みます。例えば、初めての授業で、母音と声調を勉強しますが、それだけでも「おながが空いた」ということを中国語で言えることを知り、学生の学習意欲が高まります。毎回の授業の最後には、中国語トークの時間を設け、中国語で話をしたり、学生とやり取りをしたりして、中国語でのコミュニケーションの楽しみを体験してもらいます。
3. 毎回の授業には必ず個人練習の時間とグループ練習の時間を設けます。個人練習の時間では、学生が音声聞きながらそれぞれ自分のペースで練習します。その後は3人 - 4人のグループに分けて、本文の練習や本文に基づいた会話の練習をします。練習している間、私は教室を回り、学生の発音を聞き、個人指導を行います。

今後は中国語が好きな学生がどんどん増えることを目標に、一層努力していきたいと思います。

授業区分② 受講者数が 50 名以上～ 99 名以下の開講授業

受賞対象授業名	女性の安全と法
曜日・講時	木曜日 3 講時開講
担当者名	手 嶋 昭 子
所属学部・学科	法学部法学科

授業の取り組みや工夫などについて

本科目は、女性が被害に遭うことが多い暴力の問題について実態を知り、法制度がその問題にどのように対応してきたか、被害者支援の課題は何か、を学ぶことを主たるテーマとするものです。受講生がそれまで学んできた法制度に関する知識を日常生活で起きる暴力の問題に関連付け、どのような法的手段がとり得るのかを考える、応用的、実践的な学習を目的としています。被害者支援に携わる専門家や、被害を乗り越えて支援活動を行っている当事者等をゲストスピーカーとしてお招きし、現場の生の声を直接受講生に届けることも行っています。

特に心がけていることは、ペアワーク、グループワークを取り入れ、学生同士で意見交換をし、そこで出た意見を発表してもらい全体で共有すること、毎回授業最後にコメントペーパーを提出してもらい、次回以降の授業で質問への回答や感想へのコメントを口頭で伝えたり、プリントで配布したりすることでフィードバックを行うこと、です。コメントペーパーから分かることは、予想以上に学生たちが幼少期から現在に至るまでに様々な暴力被害を受けてきており、傷つき、自信を失い、中には誰にも相談できないまま生きづらさを抱えている学生も少なくないことです。本人の承諾を得た上で、コメントペーパーの内容を匿名で紹介すると、また多くの受講生が感想や自分の体験談をコメントペーパーに書いてくれます。個人レベルの対応策から、法的、社会的レベルの課題の検討に至るまで、受講生たちと教員とで、多様な意見を自由に出し合い、共に考えていきます。受講生が熱心に意見を出してくれるからこそ成り立っている授業であり、そこに今回の受賞の理由もあるのではないかと考えています。

受賞対象授業名	児童文化学Ⅱ
曜日・講時	木曜日1 講時開講
担当者名	川勝泰介
所属学部・学科	発達教育学部児童学科

授業の取り組みや工夫などについて

本科目は児童学科2回生を対象にした前期の選択科目であり、1回生前期に開講される児童文化学Ⅰの発展科目という性格をもつものとして位置づけられています。

児童文化学担当の専任教員は2名おり、これまで総論部分にあたる児童文化学Ⅰを私が担当し、もう一人の教員が児童文化学Ⅱを担当するという形で分担していましたが、3年前に新任の教員が着任されたことを機会に、担当を交代することになりました。

児童文化はたいへん広範な内容を包含するものですが、本科目では、その中でも長い歴史をもつ児童文学を中心に講義を行っています。

児童学科の学生のほとんどは、幼稚園教諭あるいは保育士資格の取得を希望しています。そのため、教育実習や保育実習に出かけ、保育現場で絵本の読みきかせなどをする機会も多いのですが、黙読の習慣が身についた学生達は声を出して読む機会がとて少なくなっています。そのため、授業では毎回児童文学作品を配付し、それを一人ずつが交代で声に出して読むということを行っています。これは齋藤孝氏の『声に出して読みたい日本語』に先駆けて20年以上前から行ってきたものです。それ以外はとくに工夫と言えるようなものはありませんが、毎時間必ず声を出すことが受講生にとっては満足感を得られる結果となったのかも知れません。今年度の受講生は60名程度であり、例年になく多かったのですが、選択科目ということで受講生の学習意欲も高く、またいつ音読の順番が回ってくるかわからないという適度な緊張感もある授業となっているのではないかと思います。

受賞対象授業名	算数科教育方法論
曜日・講時	金曜日1 講時開講
担当者名	坂井武司
所属学部・学科	発達教育学部教育学科

授業の取り組みや工夫などについて

本講義は、既習の知識を活用して新たな知識を構成する算数科の授業作りを目指し、算数科教育に関する理論と実践の両面から、算数科を指導する教員としての資質・能力を養成することを目的としている。そこで、以下の4つの内容について、アクティブラーニングを取り入れた講義・演習を行っている。

- ① 算数科の指導内容の系統に関する講義を通して、既習の知識のつながりについて考察する。
- ② 既習の知識を活用し、新たな知識を構成する算数科の指導方法や子どもの認識について理解するために、算数科の4領域における算数的活動に関する演習を行う。
- ③ 国内外の学力調査問題の演習を通して、算数科で育みたい思考力・表現力について考察する。
- ④ 指導と評価の一体化についての理解を深めるために、算数科学習指導案の作成と模擬授業を行う。

特に、既習の知識のつながりや指導方法に関する理解が深まるように、毎回の授業において、算数科の教科書の事例を取り上げた資料を配布し、複数の事例に共通する数学的な考え方を捉える工夫を行っている。また、算数を学ぶ価値や楽しさを子どもに実感させるためには、教師がそれらを認識している必要があり、子どもの認識を理解するためにも、子どもの立場になって算数的活動を行ったり発展的な課題に取り組んだりする工夫を行っている。さらに、算数科学習指導案の作成にあたっては、学習指導案の各項目の内容や項目間のつながりについて解説を行なうとともに、授業の中で学習指導案を作成する時間を確保し、個別指導を行っている。

また、授業内容の理解を定着させるために、宿題として、毎回の授業に関する問題を2問出題し、次の授業の初めに答え合わせと解説を行うようにしている。

最後に、これからの算数科教育において、ICTの活用は避けて通れない課題であるため、国内外を問わずICTを活用した算数指導の事例紹介やICTを活用した授業体験も授業内容に取り入れていきたい。

受賞対象授業名	講読近世 A
曜日・講時	金曜日 3 講時開講
担当者名	山崎 ゆみ
所属学部・学科	文学部国文学科

授業の取り組みや工夫などについて

講読近世 A では、江戸時代の劇作家近松門左衛門の恋のドラマ『冥途の飛脚』（江戸時代の飛脚屋が、遊女との恋のために公金を横領し、遊女と駆け落ちするというストーリー）の一幕を取り上げ、クライマックスシーンに至るまでの本文を、江戸時代の文化や風俗を視野に入れて、「江戸時代にタイムスリップ」したような視点で読み解き、人形浄瑠璃のビデオを鑑賞して理解を深めた。受講生は 145 名程度であった。

毎回の配布プリントでは、江戸時代の資料や関連作品を取り上げながら、教員がオリジナルに注釈を加えたものを作成し、それに基づいて教員が講義するとともに、学生達にも、辞書を引かせ、口語訳を発表させた。毎回の授業内容についての質問やコメント、また授業環境（周囲の私語や内職が気になるなど）で気付いたことがあれば、本学定型の出席カードの裏面に記すように指示しており、寄せられた質問やコメントについては、できるだけ次週の最初に回答や対応策を示すように心がけた。

定期的に、作品についての考察や、ビデオ鑑賞を通しての考察を、10 行程度の野線のある提出カードに記入させ、それについて、総括する機会も持った。

また、作品内容や、当時の資料に関わる色々な質問を学生達に投げかけ、その場で、学生同士が相談・考察した結果について、インタビュー形式で発言を求め、その発言をできるだけ活かす方向で作品を読み進めた。さらに、折に触れて、人形浄瑠璃の公演の案内をおこない、教員の歌舞伎観劇の趣味などについても話題にし、江戸時代から現代まで受け継がれ、発展するお芝居についての関心を深めることを心がけた。

その結果、授業アンケートの自由記述欄では、「講義を楽しく受講でき、近世に関心を持った」、「プリントも講義もわかりやすかった」「ビデオ鑑賞が楽しかった。紹介された人形浄瑠璃の公演のチケットを取ることができ、生での鑑賞が楽しみ」という意見などがあり、ある程度、江戸時代の作品読解やお芝居に対する学生達の関心を深めることはできたと考える。

今後の課題としては、人数の多い授業の場合、(1) どのような自主学習を、どの程度毎週出して、各学生の学習結果の点検をどのように行えばよいのか、(2) 教員が気付かない私語や内職（スマホ閲覧など）をどのように防げば良いのか、(3) 学生達の考察カードの通読、整理に相当の時間を要するので、その作業をスムーズに行うにはどうすれば良いか、などという点がある。今後の F D 講演会などで、このような大人数授業に関わる課題をテーマとして取り上げていただきたいと思う。

受賞対象授業名	特別活動指導法
曜日・講時	月曜日 5 講時開講
担当者名	富村 誠
所属学部・学科	発達教育学部教育学科

授業の取り組みや工夫などについて

本科目は、教育学科 2 回生前期に開講されている小学校教諭免許取得にかかる必修科目であり、教育課程の教科外課程領域の一つである特別活動（学級活動・児童会活動・クラブ活動・学校行事の 4 内容）の教育的意義や各内容の目標・内容・方法についての実践的理解を図っていくことをねらっています。開講時期が附属小学校での教育実習と

併行しているという特徴、および、受講生にとって特別活動が「授業ではない時間」〔教科用図書（教科書）やテストがなく評定もない時間〕としてイメージされているという実態をふまえ、本科目の運営にあたって、次に挙げる3点の工夫を加えています。

○総括目標の意味に着目する導入部の工夫

4内容毎の各論の前に、4内容を総括した目標について、3段落（前提・内容・究極）構成および各段落のキーワードの2側面から理解する場を設けています。何をするか・どのような態度を養うか・まとめると、という3つの意味に着目することで、学校教育の一環としての特別活動の意義に関心を向けるようにしています。

○実践事例をもとに各内容について具体的に理解する展開部の工夫

4内容毎の各論は、目標・内容・方法の概要を『学習指導要領解説』記載をもとに読解する→『テキスト』掲載事例または教育実習での体験事例をもとに具体的に理解する、という2段階で展開することを通し、理論（どうあるべきか）と実践（どうあるか）を統一的に理解できるようにしています。

○「もし自分ならば」と主体的に学修内容を振り返る終末部の工夫

本科目での学修を振り返る場では、近時の教員採用選考試験の小論文・面接問題で扱われているテーマ（学級経営・生徒指導・保護者対応といった、教科学習指導以外のもの）を扱うことで、模擬想定場面における自分の教育専門職員（教員）としての指導に関心を向けるようにしています。

4回生になった受講生からの「講義内容が教授で役立った」、卒業生からの「学級づくりに役立っている」との声が本科目履修の成果であると認識し、確かさと楽しさとの両立を図った科目運営に今後とも努めていきたいと考えています。

受賞対象授業名	児童保健学Ⅱ
曜日・講時	月曜日4講時開講
担当者名	間瀬知紀
所属学部・学科	発達教育学部児童学科

授業の取り組みや工夫などについて

子どもとかわる職種において、子どもの健康を保持し、健康状態の変化を察知することは重要であることから、本授業では保育活動時に必要な健康・安全管理についての理解を深めることを目標としています。

本授業で実践している主な取り組みは以下のとおりです。

①パワーポイントによる授業内容の提示

受講生が100名を超える講義であることから、パワーポイントを使用しています。スライドにおいては重要なポイントは文字の色を使い分けることで理解を促しています。また、文字だけではなく、ある事象に関する実態や傾向について図表で示すことで視覚に訴え、具体的に説明することを心がけています。さらに、パソコンを使用することの利点の一つとして、補助的に映像教材を用いることによって内容の理解を深めています。

②レジュメの作成

毎時に授業内容のレジュメを配布し、レジュメに沿って授業を展開しています。レジュメはパワーポイントのスライドに対応し、重要項目については受講者が記述を加える形式となっています。レジュメの作成には受講者が授業後に復習しやすいように簡潔にまとめることを心がけています。

③ミニツッペーパーの活用

毎時の授業終了時にミニツッペーパーを用いて授業内容を簡潔にまとめて提出することを求めています。このミニツッペーパーにより受講者の理解度を確認しています。また、質問や意見があれば次回の授業時に対応するように心がけています。

今後は、学生のみなさんが興味・関心を示し、満足度が得られるような授業を展開できるよう授業内容を再検討し、授業改善に努力していききたいと思います。

1

学修ポートフォリオに関する FD 講演会及び使用説明会の実施

日 時：平成 28 年 12 月 21 日（水） 14 時 45 分～ 16 時〔講演会〕 16 時～ 17 時〔使用説明会〕
 会 場：C 校舎 301 講義室

「学修ポートフォリオ」の導入〔平成 29 年度より運用開始〕により、学生が主体的に自らの学修成果を定期的に振り返り、大学全体の教職員がこの情報を共有し、きめ細かい履修指導や進路指導を行うことが可能になるが、ポートフォリオ導入の意義が教職員と学生の間で共有できていなければ、授業運営上や学生指導上、さまざまな問題点や課題が浮上してくると思われるため、「学修ポートフォリオの活用方法等について」をテーマに取り上げ、外部講師を招いて講演会を実施しました。

当日は、九州工業大学情報工学研究院准教授の林 朗弘先生を招き「学修ポートフォリオシステムの開発と運用」と題して、ポートフォリオシステムを開発・導入された経緯や運用体制等について、具体的にどのような取り組みをされているか、実際の取り組み紹介を交えて講演いただきました。

講演では、10 年以上前から学修成果を学生に自己評価させる取組を進められており、その過程での学生や教員に対する有効性や実施された中での課題や対応策について、実際の経験を交え具体的に示していただきました。

当日は 142 名の教職員にご参加いただき、実施後のアンケート結果においては「事例を紹介いただき、少しイメージをもつことができた」との回答や「自己評価を有効に行うには、目標設定や振り返りがしやすい仕組みをしっかりとっておかないといけないと感じた」等、さまざまな感想が寄せられました。

今後も FD に関するテーマを設定し、外部講師を招いた講演会を実施する予定です。ご要望など、どうぞお気軽にセンターまでお寄せくださいますようお願い申し上げます。



平成 29 年度 FD 委員会	役 職	氏 名
	学長、全学自己点検・評価委員会委員長	林 忠 行
	文学部長	山 田 雅 彦
	発達教育学部長	吉 村 英
	家政学部長	中 山 玲 子
	現代社会学部長	鳥 谷 一 生
	法学部長	南 野 佳 代
	文学研究科委員長	高 橋 勝 忠
	発達教育学研究科委員長	谷 川 至 孝

役 職	氏 名
家政学研究科委員長	八 田 一
現代社会研究科委員長	西 尾 久 美 子
法学研究科委員長	泉 克 幸
教務部長	諸 岡 晴 美
総務部長	吉 川 大 栄
FD 推進委員会委員長	大 谷 正 和
図書館司書課程	桂 まに子

平成 29 年度 FD 推進委員会	役 職	所 属	氏 名
	委 員 長	教育学科音楽教育学専攻	大 谷 正 和
	副委員長	法学科・法学研究科	市 川 ひろみ
	委 員	国文学科	宮 崎 三 世
	委 員	英文学科・文学研究科	鴨 川 啓 信
	委 員	史学科	梅 田 千 尋
	委 員	教育学科教育学専攻	村 井 尚 子
	委 員	教育学科心理学専攻	稲 塚 葉 子
	委 員	児童学科	岡 林 典 子
	委 員	食物栄養学科・家政学研究科	松 尾 道 憲
	委 員	生活造形学科	江 口 淑 子

役 職	所 属	氏 名
委 員	生活福祉学科	下 村 雅 昭
委 員	現代社会学科	正 木 大 貴
委 員	外国語準学科	小 林 亜 美
委 員	発達教育学研究科	田 中 林 純
委 員	現代社会研究科	坂 爪 聡 子
委 員	図書館司書課程	桂 まに子
委 員	教務部長	諸 岡 晴 美
委 員	教務部次長・教務課長	阿 部 純 宏
委 員	学部事務課長	酒 井 桃 子

おわりに

FD 推進にかかる取り組みについて、ご意見・ご要望などがございましたら、お気軽に事務局（FD 推進センター）までご連絡ください。

また、FD 推進委員会の委員の先生方を通じてご案内しております、他大学・団体等が開催するセミナーやシンポジウム等につきましても、FD への理解を深める一助として、是非ご参加くださいますようよろしくお願いいたします。

◆発行日
平成 29 年 7 月 28 日

◆発行者
京都女子大学 FD 推進委員会

◆事務局
教務部学部事務課 FD 推進センター
TEL : 075-531-7045、9121
E-mail : gakuji@kyoto-wu.ac.jp (学部事務課)
nisiyama@kyoto-wu.ac.jp (担当：西山)

